

古本節用集の研究索引

ア

朝山意林菴素心 八七
荒木田盛貞 三三三
荒木田盛徴 三三三

イ 井

「い」「ぬ」「を」「お」「え」「る」の諸部
假名引辭書に於ける「い」
「ぬ」「を」「お」「え」「る」の諸部
部 一三〇-一三三、
いろは節用集大成 三三三、
イ部天地門最初の語 二二〇、
部 三三九、
イ部最初の語 三三九、
イリン 八八、
「ぬ」「お」「る」の三部
易林本類の「ぬ」「お」「る」の

三部 二九、
易林本の「ぬ」「お」「る」の二部 二二五、
部 二二五、
仙源抄に於ける「ぬ」「お」「る」の三部 三三五、
伊京集 解題 六三六、三六七、
其の特徴 六三、
其の系統 二〇〇、二一一、
「え」部所收の語 二二〇、
門數 一五三、
門の順序 一五七、
門名 一六〇、
語數 一六三、
衣服に關する語 一五三、
附錄の數 一三三、
京町盡 一三三、一四九、
十千十二支 二二五、二二〇、
伊勢本原本との比較 二二四、

溫故堂本との比較 一九六、
溫故堂本との關係 一九九、
天正十八年本類との比較 二〇一、
較 二〇一、
天正二十年本との關係 一九九、
天正二十年本原本との關係 二〇〇、
關係 二〇〇、
饅頭屋本との比較 二〇九、
二一〇、
饅頭屋本との關係 二一一、
二一二、
明應五年本との比較 二〇九、
伊勢平藏貞丈 二五、
伊勢本 「伊勢本に同じ。」 五、
「伊勢」本 六、
其の特徴 六、
門名 一六〇、
京町盡の位置 一四八、
日本諸國名の所在 一五〇、
伊勢本に於ける「印度」の位置 三三九、三三一、

諸本解題 六〇八、
諸本の關係 一九七、二〇四、
諸本の系統 二二一、
諸本系統表 二二三、
他の兩本との差異 二二九、
乾本との關係 二五三、
乾本との關係に關する 二四六、
一説 二四六、
印度本との差異 二三八、
印度本との關係 二二二、二二五、
二二六、二二七、
易林本との差異 二三五、
伊勢本の原本 二二三、二二五、
其の門數 二二五、
伊勢本原本及び之から出た三本の體裁 二二三、
伊勢物語 三三七、
伊呂波 三三七、
伊呂波の誦法 二三五、
伊呂波の誦法と節用集の卷冊の分ち方との關係 二三七、

韻府(韻府群玉) 三六、三七、 韻府群玉 二九七、三〇七、三〇〇、 韻略 三二、 陰時夫 二九七、三〇〇、 「印度」 伊勢本に於ける「印度」の 位置 三九、三三、 乾本に於ける「印度」の位 置 二四八、 印度本 「印度」本に同じ。 「印度」本 四、 其の特徴 六、 門名 一六〇、 名乗集 一三六、 日本諸國名の所在 一三三、 諸本解題 六六〇、 諸本の關係 一六七、一七〇、 諸本系統表 一六、 印度本伊勢本乾本相互 の關係 二九、五二、 印度本と伊勢本(其の關 係) 二二、二三五、三三、三四、	伊勢本との差異 二五三、 乾本との關係 二四八、二五三、 易林本との差異 二五五、 印度本節用集と下學集 三九、 印度本の原本 一九六、 其の體裁 一九七、 其の系統 二三四、 門の順序 二四六、 日本諸國名 二三八、 易林本との比較 二四六、 天正二十年本との比較 二二、二二七、 部門の比較 二二、二二三、 所收の語の比較 二二三、二三五、 註の比較 二五、二七七、 天正二十年本との關係 二七、 門立てから見たもの 二二三、	所收の語から見たもの 二四、 の 二四、 註から見たもの 二七、 ウ 上村觀光 四二、二六七、二九、 運歩色葉集 三、一三、一三八、 三九、三三、三六、三四、 天正十五年寫本 二五、 天文十九年本 三四、 工 エ 「ゑ」部 「え」部と「ゑ」部を分つ たものと併せたもの 二九、 溫故堂本と増刊本との 「ゑ」部の由來 一三〇、 惠空 三五〇、 惠梵 一三三、一三六、	永享大饗記 二六四、 永樂大典 二九六、 永祿五年本 解題 三〇、三〇、 「え」部所收の語 一三〇、 人名門 一五五、 語數 一六二、 名乗集 一三六、一三七、 分毫字樣 一四七、 京町盡の位置 一四、 堯空本及び兩足院本と の比較 一四、 堯空本との異同 四〇、 村井本との異同 三五、 永祿十一年本 解題 一三八、 其の系統 一七三、 其の引用書 三三六、 永祿十一年本に於ける 補訂 一七〇、 冊數 一三三、一三三、 其の原本の冊數 一五、
--	--	---	--

門の順序	一五七	本と寛文二年版真草	永祿二年本類	諸本相互の關係	一五七、一五八
イ部言語數量門	一五四	二行節用集との關係	其の特徵	諸本系統表	一五八
ヒ部財寶衣服門	一五四		其の引用書	枳園本との異同	一五八、一五九
語數	一五三	永祿二年本	永祿二年本類及び枳園	枳園本との比較	一五八、一五九
附録の數	一五三	解題	本の年代	枳園本との關係	一六〇
京町盡	一五三	其の書寫年代	冊數	弘治二年本類との關係	一五九
京町盡の位置	一四八	「え」部所收の語	門數		
日本國盡	一四三	語數	門の順序		
分毫字樣	一四三	附録の數	官名門		
國語研究室本との比較	一四三	名乗集	イ部數量門		
	一四三	分毫字樣	數量に關する語		
	一四三	京町盡の位置	イ部數量門に於ける語		
弘治二年本との關係	三五九	永祿五年本との異同	の順序		
	一七二、一七六	永祿五年本との關係	ミ部光彩門に於ける語		
圖書寮零本との比較	二二三	永祿五年本との關係	の順序		
圖書寮零本との關係	二二三	枳園本との異同	附録の多少		
	二二三	堯空本及び兩足院本との比較	京町盡		
和漢通用集との比較	一六八	堯空本との異同	日本國盡		
	一六八	村井本との異同	分毫字樣(點畫小異字)		
永祿十一年本を饅頭屋	一六八	村井本との比較	「八音」の所在		
本とする説	一六八	村井本との關係	諸本解題		
永祿十一年本の如き異	一六八				

其の體裁	一八三	第一種第二種第三種の 原本との關係	一八二	弘治二年本類原本との 關係	一九二、一九六、 一九七	永祿本	二七	易林	八五、八七	易林の跋ある活字本	九一	易林のよみ方	八九	易林本	九二、九四、 九六	解題	三六	易林本の價值	三四	易林本の異本	三八	「わ」「お」「る」の三部	三五	名字神祇二門の由來	三六	人名門の由來	三八	京町盡の位置	四八	名乗集	三七	「五山」の所在	一五	易林本の註	二四	他類の諸本との差異	三五	國語研究室本との比較	三六
小山版慶長十五年本との 關係	三六	増刊本との關係	三八	草書本との比較	九三	草書本との關係	二四	慶長十五年草書本との 關係	一三、二六	慶長十六年本との比較	九	慶長十六年本との關係	二五、二八	易林本と別版易林本	一六	饅頭屋本との關係	二六	和漢通用集との關係	二五	門立て及び門の順序 から見たもの	二四	和漢通用集との比較	二六、二七	門立ての比較	二六	門の順序の比較	二六												
所收の語の比較	二四	附録の比較	二四	聚分韻略との關係	二四	（猶「乾本」及び「易林本類」 參照）	九	易林本といふ名	二六	易林本別本	二六	易林本類	二六	其の特徵	二六	卷數	二二、二三、二四	部數	二九	「わ」「お」「る」の三部	二九	門數	二五	門の順序	二五、二六	門名	二六	語數	二六	カ部言語門に於ける語 の順序	二六	易林本類に於ける特異 な語	二六	附録の多少	二六	京町盡	二六		
名乗集	二六、二九	日本國盡	二四、二五	和漢通用集の日本國 盡との關係	二四、二五	分毫字樣	二四	諸本解題	二四、二五	國語研究室本との類似	二五	枳園本との異同	二五	増刊本との類似	二五、二七	増刊本との關係	二七	（猶「乾本」「易林本」參照）	二七	淵鑑類函	二六	遠碧軒記	二六	オ	二六	尾崎雅嘉	二九	小山版慶長十五年本 の部にあり。	二九	奥羽觀蹟聞老志	二九		二九						

應其	三六	部數	一九	天正二十年本との關係	一九	京師九陌名	一四
王圻	二九	「え」る南部	一九、一〇、三三	天正二十年本原本との關係	一九	十干十二支	一五
王在莪	二九	「る」部の由來	三〇	關係	二〇〇	點畫小異字	一四
王仁煦	二九	「る」部の出處	三三、三三	饅頭屋本との比較	二〇九	下學集古本に於ける點	一四
橫川	二〇、三三、三六	門數	一五	二〇	畫小異字	二四	
大伴廣公	三三	門の順序	一七、五九	明應五年本との異同	二〇四	枳園本の書入に引用せ	
鸚鵡抄	三五	イ部數量門	一六	音引辭書	二九五	られた下學集	一六
歐陽詢	二九	畜類門の名	二六	音引の漢字辭書	三〇〇	塵芥との關係	二九、三九
往來	二八	語數	二六	蔭涼軒日錄	一〇九	節用集との關係	二七、二八
往來の類	三九	衣服に關する語	一五			節用集との關係	二七、二八
岡村左近	四四、四六	註	二二			註から見たもの	二八
乙類の辭書	三〇、四〇、五〇、七〇	附錄の多少	二三	カ	ガ	節用集との比較	二八
	三三、三九	京町盡	一四、四九	ク	ク	門目の比較	二八、三五
溫故知新書	三三、三九、三三	十干十二支	一五	河海抄	三五、三七、三九	所收の語の比較	二八
	三三、三六	他本との比較	一八	下學集	三九	節用集の所收の語との關係	三五、三六
聚分韻略等との關係	三三	印度本との比較	二三	其の書名	二七	節用集原本所收の語との比較	二七
塵芥との關係	三五	易林本との比較	二四、四四	其の著者	二七	下學集との關係から見た節用集著作の年代	二八
溫故堂文庫	六	增刊本との比較	二〇、三〇、六	其の古寫本(宮内省圖書寮藏)	一四七	永祿二年本類及び枳園	二八
溫故堂本		天正十八年本類との比較	二〇	足利時代の通俗辭書の代表者	三四		
解題	七七	較	二〇	門立て	三三		
其の特徴	七	天正十八年本類との關係	二〇				
其の系統	一〇〇、一一	係	二〇				

增刊本との類似 二〇七、 天正十八年本類との比 較 一八四、一八五、 其の註と下學集との關 係 二七五、二七六、 綺語抄 三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、 起頭聲類 二九三、 木村孔恭 六〇、 貴嶺問答 三三九、 宜竹和尚日涉記 一九三、三七七、 橘菴漫筆 一〇一、一〇二、一〇三、 喫茶往來 二六〇、三三九、 舊刻書目 七六、八六、九〇、一二二、 一二三、一二四、 舊板書目 八六、 舊本節用集 二六、 清原家の撰とする説 二六五、 清原業忠 二六四、二六五、 清原宣賢 二六三、二六四、二六七、 許慎 二九六、二九七、 京京中小路名 一三三、	京(伊呂波の終にある) 「伊呂波」を見よ。 京中小路名 一三三、 京都五山歷代 二〇八、二〇九、二一〇、 京都佛教大學圖書館古寫 古版目錄及略解題 八五、 京町盡 一三三、一三五、一四七、一五〇、 京町盡の出處 一四〇、 國語研究室本に於ける 京町盡 三六二、 節用集原本に於ける京 町盡 三六一、 節用集原本に於ける京 町盡の位置 一四八、 節用集の京町盡と伊呂 波の終の京との關係 一四九、 節用集附録の京町盡と 伊呂波の終の京との 關係 二八二、二九〇、 教圓 二五、二七、 況齋雜記 三四、	堯空 三七八、 堯空本 解題 三六四、 門數 一六三、 門の順序 一五七、 堯空本に於ける特異な 語 一六三、 京町盡 一三三、一四八、 名乘集 一三六、 日本國盡 一四三、 分毫字樣 一四三、 五辻本との異同 一四三、 永祿二年本同五年本と の比較 一四三、 枳園本との異同 一四三、 經亮本との異同 一四三、 前田本との異同 一四三、 村井本との異同 一四三、 兩足院本との異同 一四三、 兩足院本との關係 一四三、 行書易林本 一四三、 玉篇 二九六、二九七、二九八、三〇五、	愚雜俎 一〇二、二六、 偶奇假名引節用集 三三三、 草間直方 一五、 熊次郎 七、 黑河春村 一八、一〇七、一〇八、 一〇九、一一〇、一一一、 一七五、一七六、 一七七、一七八、 黑川本 七〇七、 解題 一三三、 冊數 一〇〇、 語數 一〇〇、 群書一覽 一六四、一六五、一六六、 一六七、一六八、 一六九、 一七〇、 一七一、 一七二、 一七三、 一七四、 一七五、 一七六、 一七七、 一七八、 一七九、 一八〇、 一八一、 一八二、 一八三、 一八四、 一八五、 一八六、 一八七、 一八八、 一八九、 一九〇、 一九一、 一九二、 一九三、 一九四、 一九五、 一九六、 一九七、 一九八、 一九九、 二〇〇、 二〇一、 二〇二、 二〇三、 二〇四、 二〇五、 二〇六、 二〇七、 二〇八、 二〇九、 二一〇、 二一一、 二一二、 二一三、 二一四、 二一五、 二一六、 二一七、 二一八、 二一九、 二二〇、 二二一、 二二二、 二二三、 二二四、 二二五、 二二六、 二二七、 二二八、 二二九、 二三〇、 二三一、 二三二、 二三三、 二三四、 二三五、 二三六、 二三七、 二三八、 三三九、 三四〇、 三四一、 三四二、 三四三、 三四四、 三四五、 三四六、 三四七、 三四八、 三四九、 三五十、 三五一、 三五二、 三五三、 三五四、 三五五、 三五六、 三五七、 三五八、 三五九、 三六〇、 三六一、 三六二、 三六三、 三六四、 三六五、 三六六、 三六七、 三六八、 三六九、 三七〇、 三七一、 三七二、 三七三、 三七四、 三七五、 三七六、 三七七、 三八〇、 三八一、 三八二、 三八三、 三八四、 三八五、 三八六、 三八七、 三八八、 三八九、 三九〇、 三九一、 三九二、 三九三、 三九四、 三九五、 三九六、 三九七、 三九八、 三九九、 四〇〇、 四〇一、 四〇二、 四〇三、 四〇四、 四〇五、 四〇六、 四〇七、 四〇八、 四〇九、 四一〇、 四一一、 四一二、 四一三、 四一四、 四一五、 四一六、 四一七、 四一八、 四一九、 四二〇、 四二一、 四二二、 四二三、 四二四、 四二五、 四二六、 四二七、 四二八、 四二九、 四三〇、 四三一、 四三二、 四三三、 四三四、 四三五、 四三六、 四三七、 四三八、 四三九、 四四〇、 四四一、 四四二、 四四三、 四四四、 四四五、 四四六、 四四七、 四四八、 四四九、 四五〇、 四五一、 四五二、 四五三、 四五四、 四五五、 四五六、 四五七、 四五八、 四五九、 四六〇、 四六一、 四六二、 四六三、 四六四、 四六五、 四六六、 四六七、 四六八、 四六九、 四七〇、 四七一、 四七二、 四七三、 四七四、 四七五、 四七六、 四七七、 四七八、 四七九、 四八〇、 四八一、 四八二、 四八三、 四八四、 四八五、 四八六、 四八七、 四八八、 四八九、 四九〇、 四九一、 四九二、 四九三、 四九四、 四九五、 四九六、 四九七、 四九八、 四九九、 五〇〇、 五〇一、 五〇二、 五〇三、 五〇四、 五〇五、 五〇六、 五〇七、 五〇八、 五〇九、 五一〇、 五一一、 五一二、 五一三、 五一四、 五一五、 五一六、 五一七、 五一八、 五一九、 五二〇、 五二一、 五二二、 五二三、 五二四、 五二五、 五二六、 五二七、 五二八、 五二九、 五三〇、 五三一、 五三二、 五三三、 五三四、 五三五、 五三六、 五三七、 五三八、 五三九、 五四〇、 五四一、 五四二、 五四三、 五四四、 五四五、 五四六、 五四七、 五四八、 五四九、 五五〇、 五五一、 五五二、 五五三、 五五四、 五五五、 五五六、 五五七、 五五八、 五五九、 五六〇、 五六一、 五六二、 五六三、 五六四、 五六五、 五六六、 五六七、 五六八、 五六九、 五七〇、 五七一、 五七二、 五七三、 五七四、 五七五、 五七六、 五七七、 五七八、 五七九、 五八〇、 五八一、 五八二、 五八三、 五八四、 五八五、 五八六、 五八七、 五八八、 五八九、 五九〇、 五九一、 五九二、 五九三、 五九四、 五九五、 五九六、 五九七、 五九八、 五九九、 六〇〇、 六〇一、 六〇二、 六〇三、 六〇四、 六〇五、 六〇六、 六〇七、 六〇八、 六〇九、 六一〇、 六一一、 六一二、 六一三、 六一四、 六一五、 六一六、 六一七、 六一八、 六一九、 六二〇、 六二一、 六二二、 六二三、 六二四、 六二五、 六二六、 六二七、 六二八、 六二九、 六三〇、 六三一、 六三二、 六三三、 六三四、 六三五、 六三六、 六三七、 六三八、 六三九、 六四〇、 六四一、 六四二、 六四三、 六四四、 六四五、 六四六、 六四七、 六四八、 六四九、 六五〇、 六五一、 六五二、 六五三、 六五四、 六五五、 六五六、 六五七、 六五八、 六五九、 六六〇、 六六一、 六六二、 六六三、 六六四、 六六五、 六六六、 六六七、 六六八、 六六九、 六七〇、 六七一、 六七二、 六七三、 六七四、 六七五、 六七六、 六七七、 六七八、 六七九、 六八〇、 六八一、 六八二、 六八三、 六八四、 六八五、 六八六、 六八七、 六八八、 六八九、 六九〇、 六九一、 六九二、 六九三、 六九四、 六九五、 六九六、 六九七、 六九八、 六九九、 七〇〇、 七〇一、 七〇二、 七〇三、 七〇四、 七〇五、 七〇六、 七〇七、 七〇八、 七〇九、 七一〇、 七一一、 七一二、 七一三、 七一四、 七一五、 七一六、 七一七、 七一八
---	---	--	---

京師九陌	二二、	慶長十六年本に存する	言翁	二六四	諸本解題	三〇〇、
景三横川	二六、	伊呂波	元亨釋書	二八、三七、	諸本の類別	四、
桂室	二六七、	易林本との比較	源氏秘抄	三五、	諸本分類の標準	四、
蕙洲	三五、	易林本并に草書本との	源氏物語千鳥抄	三七、	諸本の書寫又は刊行の	二七、
慶長十五年草書本	二二、二三、	關係	原中最秘抄	三四、	年代	二七、
其の系統	二五、	慶長十五年草書本との	コ ゴ		諸本の成稿の年代	二四、
易林本との關係	二三、	關係			諸本の比較	二二、二七、
慶長十六年本との關係	二八、	寛永以後の節用集との			卷冊數	二二、二八、
慶長十二年本	二八、	關係	壺	三八、	部數	二八、三三、
解題	六七、	桂林漫錄	虎關	二五、二九、三〇、三二、	附錄	一三、二五、
冊數	二三、	藝文類聚	虎關和尚行狀	三三、三九、三七、	門立て	一五、一六、
語數	二〇、	月舟壽桂	古今秘注	二五、	所收の語	一六、二七、
門及び語の順序	二〇、	兼霞堂	古今韻會舉要	二九、三〇、	諸本比較表	附表第一、
黒川本との異同	七七、	健叟	古文孝經抄	二六、	諸本附錄比較表	附表第二、
慶長十六年本	九七、一〇〇、	建仁寺の僧	古文眞寶抄	三八、	諸本門名比較表	附表第三、
解題	二八、	節用集を建仁寺の僧の	古本節用集	三、	諸本の系統的關係	二二、二五、
其の系統	二八、	作とする説	其の體裁	三、	諸本の系統的關係考定	一六、
眞草二行とした所以	二五、	建武式目	其の特徴	三、	諸本系統表	二五、
京町盡の位置	一四、	建武年間記	諸本の部數	三、	未見の諸本(解題)〇、一五、	二五、
十千十二支の所在	一五、	玄惠	門	三、四、	未見の諸本の系統	二四、
「五山」の所在	一五、	玄玉和歌集	本文最初の語	四、		

(猶)節用集(参照) 故節用集 三〇	顧野王 二九六、二九七	小山仁右衛門永次 二四	小山版慶長十五年本 二二二、二五	其の系統 二五五	易林本との關係 二四	語(節用集所收の語) 「所收の語」を見よ。	語學新書 三五	五車韻瑞 二九七	五十音順の辭書 三三	廣韻 二九七、三〇七、三〇	廣益書籍目錄(元祿五年刊) 二五七、二六〇	廣雅 二九六、二九七、二九八	弘演 二九八	弘治二年本 六二	解題 一七	其の系統 一七	其の年代 一〇
其の引用書 三六	弘治二年本に於ける補 訂 一七	イ部言語數量門 一五四	ヒ部財寶衣服門 一五四	語數 一六三	附錄の數 一三三	京町盡 一三三、一三四	京町盡の位置 一四八	日本國盡 一四	分毫字樣 一四六	永祿十一年本との異同 一七二	永祿十一年本との關係 一七二、一七三	永祿十一年本との關係 一七二、一七三	永祿二年本との異同 三〇	弘治二年別本との關係 三二、三三	國語研究室本との異同 三五九	圖書寮零本との異同 二二三	
圖書寮零本との關係 一六八	和漢通用集との比較 二九	弘治二年別本 解題 一二三	冊數 一三三、一三四	弘治二年本との比較 二七	弘治二年本との關係 二二、二七	弘治二年本類 其の特徵 六	弘治二年本類に於ける 補訂 一七	門數 一五	門の順序 一五	門名 一六〇	ミ部の草木光彩兩門の 位置 一四	衣服に關する語 「八音」の所在 數量に關する語 一五、一六、一七	京町盡 一三	名乘集 一三			
諸本解題 六二五	諸本相互の關係 一六七、一七三	諸本系統表 一七三	乾本との關係 三六	易林本との關係 二五	永祿二年本類との比較 門立ての比較 一六二、一六三	註の比較 一九二、一九三	所收の語の比較 附錄の比較 一九五	永祿二年本類との關係 門立てから見たもの 一八〇、一八七	註から見たもの 國語研究室本との比較 一四九	明應五年本との異同 寛文二年版眞草二行節 用集との關係 一四四、一四九	弘治二年本類の原本 其の體裁 一七一						

鎌倉室町時代の辭書	二五三、三三	釋氏往來	三三九	書史會要	三三、一九	徐堅	二六、二六
辭書の歷史上から見た	三三、三七	釋名	二六、二九、二八、三六	所收の語(古本節用集の)	一六、二六	尙襲舍	二六
節用集	三六、三七	守覺法親王	三三九	所收の語に關する調査	一六、二六	匠材集	三六
辭書の歷史上に於ける		拾遺集	三七	の方針	一六、二六	小爾雅	二六、二九、二九
節用集の位置	三四、二五	拾芥抄	三三、三五、四〇	所收の語の數	一六、二六	昌住	二九
音引辭書	二五	集韻	二九、三七	諸本に存する特殊な語	一六、二六	掌中歷	一四、三九
假名引辭書	三〇、三〇、三三	聚分韻略	二八、二八、三〇、三二	語の異同と語の順序の	一六、二六	聖德太子憲法十七條註	二六、二九
五十音順の辭書	三三	溫故知新書との關係	三三、三三、三三	異同	一六、二六	蔣飭	二九
分類體辭書	二五	溫故知新書との比較	三六	節用集の語及び其の順	一六、二六	定深	三九
字形引辭書	二五	節用集との關係	三三、三五	序の差異の多い所以	一六、二六	「淨藏貴所」の註	二六、二九、三五
熟語辭書	三〇、二七	十禪支	二五	イ部天地門最初の語	一六、二六	常忠	二四
(猶「漢字辭書」「國語辭書」)		十二月往來	一四、三九	イ部天地門最初の語の	一六、二六	貞永式目抄	二六
參照		祝尙丘	二九	相違	一六、二六	上覺	二四
慈鎮	三四	熟語辭書	三〇、二七	イ部最初の語	一六、二六	職原抄	二六
事文類聚	二六、三七	十勝論	二五	門の有無と語の有無	一六、二六	新安手簡	二六、二九、三七
事林廣記	三七	十干十二支	二五、二六、二五	門の比較と語の比較	一六、二六	新韻集	一三、三四
鹽瀨傳來記	二九	順德院	三四	同じ語の附録にあるもの	一六、二六	新刊節用集大全	二九、二五
悉曇具書目錄	二九	初學記	二六、二九、三〇、三二			新校點禮記	三七
悉曇輪略圖抄	二九					新札往來	三九
實嚴	三九					新猿樂記	三六

新十二月往來	三九	塵芥	一五二〇、	圖書寮零本に於ける補	菅原是善	二九
新撰字鏡	二九、二九、三〇、三〇、六	解題	一五二〇、	訂	菅原爲長	三六
新撰類聚往來	一四、一四、三九	其の本名	一八	冊數	資宗王	三四
三六、		其の完本の冊數	二六	分冊法		
新撰類聚往來中の日本		其の著作年代	二九	門の順序		
國盡	一四、	部數	三三、	ヒ部財寶衣服門		
新增色葉節用集	一〇七、一二、	門立て	三三、	語數		
二七〇、二七、三六、		他書との關係	三五、三八、	附録の數		
其の系統	二五、	溫故知新書との關係	三五、	名乗集		
其の編述の年代	一〇八、六、	下學集との關係	三七、	日本國盡		
其の序と横川說	二六、	節用集との比較	五、二八、	京町盡の位置		
天正十八年本類との比	二二、	三六、		國語研究室本との比較		
較		節用集との關係	三七、	弘治二年本永祿十一年		
新注尙書	三七、	座添壺囊抄	二九、	本との關係		
新村出	二七、二九、二七、	人名考	一四、	天正二十年本との比較		
心覺	三〇九			和漢通用集との比較		
臣軌	三三七	スズツ		三、		
眞草二行節用集	九七、	ヅフハルマ辭書	三三、	季綱往來		
眞草二行節用集(寛文二年	三〇九	圖書寮零本	三三、	季綱切韻		
版)	三〇九	解題	一八三、	數字異體		
眞蓮寺	六三、六四	其の系統	一七、			
申齋隆德	八六、					

節用集に關する從來の研究 一、 節用集の行はれた所以 三二、 我が國の辭書と節用集 二五、三四七、 辭書の歷史上から見た 節用集 三六、三四七、 辭書の歷史上に於ける 節用集の位置 三四一、 足利時代の通俗辭書の 代表者 三四三、 節用集の諸本 節用集の古本 三七、 諸書に名の見えた節 用集の諸本 一〇〇、 世事百談に見える古 寫本節用集 一二五、 伊呂波引の節用集 三五二、 合類本 三五〇、 寛永以後の節用集 三四八、三五六、	延寶以前の節用集 三八、 明治時代の節用集 三五、 (猶「古本節用集」參照) 節用集の名義 二九、二九四、 尾崎雅嘉の説 二九一、 俚言集覽の説 二九三、 節用集の著者 二五七、二七三、 虎關説 二五七、二七一、 玄惠説 二五九、 横川説 二六〇、二六〇、 環翠軒説 二六二、二七一、 清原宣賢説 二六三、 清原業忠説 二六五、 清原家の撰とする説 二六五、 林宗二(林逸)説 二六五、 三七二、 建仁寺の僧の作とす る説 二七一、 節用集の著者に關す る諸説の出處 二七一、 節用集の著者に關す	る諸説 三七〇、 林家と節用集との關 係 二六九、 節用集の増訂者 二七二、 三七二、 節用集の著作年代 二七三、二九二、二六八、 諸本の年代から見た もの 二七五、 下學集との關係から 見たもの 二八八、 節用集著作年代に關 する一説 二八九、 節用集の各類の原本 の年代 二八二、 節用集編輯の資料 三五三、 諸本の訂補資料 三四〇、 節用集と他書との關係 節用集が他書に及ぼ した影響 三四四、 色葉集との比較 三三八、	伊呂波字類抄との類 似 三八、 伊呂波字類抄との相 違 三三〇、三三一、 伊呂波字類抄との關 係 三三三、三四四、 下學集との關係 二七、 二八七、三五三、 註から見たもの 二八三、 下學集との比較 門目の比較 二八三、三五、 所收の語の比較 二六四、 節用集の註と下學集 との關係 二七七、二八二、 塵芥との比較 五二八、 三八、 塵芥との關係 三七、 聚分韻略との關係 三四三、 節用集の原本 二五二、二五六、二五三、 三六〇、 其の體裁 二五三、
---	---	--	---

部數	二三、	禪儀外文	二五、	分毫字樣	一四、
卷冊數	二六、	善隣國寶記	一〇九、三三、	他の伊勢本との關係	二〇三、一〇七、
京町盡	三六、	ソ ゾ	四〇、四二、 三六、 二六、三七、 四一、九、二六、 二五、	易林本との關係	二三八、
京町盡の位置	一四八、			易林本類との關係	二〇七、
附録の數	一五、			易林本類との類似	二〇五、一〇七、
節用集原本に於ける註	二六、			枳園本との類似	二〇七、
の有無	二六、			新増色葉節用集との比	二〇八、
其の所收の語と下學集	二八、	宗伯	二六、三七、	較	一〇八、
節用集考	一八、一八、九、一〇、 一〇七、一一、一一、二五、 二六、二四、二六、二六、 二七、	宗博	四一、九、二六、	溫故堂本との比較	二〇三、一〇六、
仙源抄	三三、三三、三五、 三六、	宗尤	二五、	天正十八年本との關係	八、
仙源抄に於ける「お」	三五、	草書本	九、九、	天正十八年本類との比	二〇四、一〇六、
仙源抄の假名遣論	三五、	解題	三三、	較	一〇六、
洗心子	二六、	草書とした所以	三三、	文龜本との關係	二〇六、
		冊數	九、	増補合類節用集大全	三五、
		京町盡の位置	一四、	續善隣國寶記	一〇九、
		十千十二支の所在	一五、	續本朝文粹	三〇〇、
		「五山」の所在	一五、	俗名集	二六、
		易林本との比較	九、	存古堂	四、
		易林本との關係	二四、		
		慶長十五年草書本との比較	二三、		
		慶長十六年本との關係	二三、		
		寛永以後の節用集との關係	二五、二六、		
		關係	三四、		
		草書本を饅頭屋本とする説	九、		
		増刊本(増刊節用集)	七九、三三、七、		
		解題	八、		
		其の意義	九、		
		其の特徵	二〇六、二二、		
		其の系統	二〇六、二四、		
		冊數	二九、		
		部數	二九、		
		「え」の兩部	二九、二〇、一三、		
		「る」部の出處	二二、一三、		
		門數	一五、		
		門の順序	一七、一五、三七、		
		門名	一六、		
		語數	一六、		
		附録の多少	一三、		
		日本諸國名の所在	二九、		
		京町盡	一四、四九、		
		十千十二支	一五、		

孫仙 孫仙 孫仙	二九六 二九七、二九八	前田本との比較 一八二 村井本との比較 一七五 村井本との關係 一七六 第二種の諸本との關係 一七五 第三種の原本との比較 一八二 第一種の辭書 二九五、二九六、二九七 第一本(伊勢本中の) 二二一、二二三、二四三、二五五 第三種(永祿二年本類中)の原本 一八二 第一種第二種の原本との比較 一八二、一八三 第二種の諸本との比較 一八二 第二種第三種の原本との關係 一八二 第三種の諸本との關係 一八二 第三種(永祿二年本類中)の諸本 一八二	多羅葉記 三〇九 田宮仲宣 一〇一、一〇三、一五一 戴侗 二九六 太平記 四、二九六、三〇七、三〇九 太平御覽 二九六、三〇三、三七 太平廣記 三〇九 第一種(永祿二年本類中)の原本 一七五 第二種第三種の原本との關係 一八二 第三種の原本との比較 一八二 永祿二年本類原本との關係 一八二、一八三 第一種(永祿二年本類中)の諸本 一七五	諸本 一七五 其の系統 一八二 第三種の辭書 二九五、二九六、二九七、二九八、三〇一、三〇五、三〇七、三〇九、三二四、三三五 第三本(伊勢本中の) 二二三、二三四、三三五 第二種(永祿二年本類中)の原本 一七五 第一種第三種の原本との關係 一八二 第三種の原本との比較 一八二、一八三 永祿二年本類原本との關係 一八二 第二種(永祿二年本類中)の諸本 一七五 第一種の諸本との關係 一七五 第三種の原本との比較 一八二 枳園本との比較 一八四 枳園本との關係 一八六	前田本との比較 一八二、一八三 前田本經亮本五辻本との比較 一七五 村井本との比較 一七五 村井本との關係 一七六 第二種の辭書 二九五、二九六、二九七、二九八、三〇五、三〇六 第二本(伊勢本中の) 二二一、二二三、二四三、二五五 大惠書 三〇七 大廣益會玉篇 一四六 大日本史料 二六〇、二六五 橘忠兼 三〇〇 谷川士清 三三三 谷口松軒 三三三 丹峰 三三九
タ ダ				于 竺芳妙茂 一〇八 中州集 三七 註の詳略と多少 一〇	

張揖	二九六、二九七	語數	一六三	黑川本との比較	七二七
張英	二九六	經亮本に於ける特異な	二六〇、二八三、三九	慶長十二年本との比較	七
長慶院	三四三、五	語	一六三	增刊本との比較	八三
長孫訥言	二九八	附録の數	一三三	增刊本との關係	八二
長半假名引節用集	三三	附録北條氏系圖の註	二六五	文龜本との關係	一〇五
塵芥	シ(チ)の部にあり。	名乗集	一三六、一三八	森氏本との比較	四
陳道固	二九八	日本國盡	一四二	天正十八年本類	六五、七四
陳彭年	二九七	分毫字樣	一四六	諸本解題	六五、七四
ツ					
通憲入道藏書目錄	三〇〇	「八音」の所在	一五	其の特徵	五
通俗篇	二九六	經亮本の基とした本	一五	其の系統	二〇一、二二
經亮本	二九六	五辻本との比較	一五、一八〇	冊數	二四
解題	四六五	枳園本との比較	六〇	門數	一五
其の系統	一六、一八三	前田本との比較	一五、一八〇	各部に於ける門數	一五
經亮本前田本五辻本の	一六	前田本との關係	一五、一八〇	門の順序	一五、一五三、二三
特徵	一六	壺	三六	門名	一六〇
冊數	二二、二四	鶴峯戊申	三五	語數	一六
門數	一五	テ			
門の順序	一五	定家	一六	天正十八年本類に於ける特異な語	一六
樂名門の名	一六	定家假名遣	二七、三六、三九	人名官名に關する語	一六
				附録の多少	一三

京町盡	一三四	其の特徴	六〇	註の比較	二五、三七	其の系統	二二、
十千十二支	一三五	其の系統	二〇〇、二二、	印度本原本との關係	三七	印度本との比較	二三、
他の伊勢本との關係	二〇〇、二〇一、	「え部所收の語	二〇〇、	門立てから見たもの	二三、	印度本との關係	三七
饅頭屋本との比較	二二〇、	門數	一五、	所收の語から見たもの	二四、	印度本原本との關係	二四、
枳園本との比較	一八四、一八五、	各部に於ける門數	一五、	の	二四、	天正十八年本類との比	二〇一、
新増色葉節用集との比	二二、	門の順序	一五、	註から見たもの	三七	較	二〇一、
新増色葉節用集との關	二二、	イ部數量門(永祿二年本	一五、	易林本との比較	二四、二五、	饅頭屋本との關係	二二、
係	二五、	類との比較)	一五、	溫故堂本との比較	七、	天神緣起	三七、
増刊本との比較	二〇四、二〇六、	イ部數量門の位置	一八、	溫故堂本との關係	一九、	天文本	八一、
天正二十年本との比較	一五、	門名	一六、	溫故堂本との關係	一九、	典籍秦銳	七、一〇、
天正二十年本以下三本	二〇一、	語數	一三、	天正十八年本類との比	一五、二〇一、	トド	
との比較	二〇一、	衣服に關する語	一五、	較	一五、二〇一、	圖書寮零本	
天正二十年本の原本と	二〇一、	附錄の多少	一三、	天正十八年本類との關	二〇一、	ス(ツ)の部にあり。	
の關係	二〇一、	京町盡	一四、二四、	係	二〇一、	唐韻	二九、三〇、
天正十八年本類の原本	二〇一、	伊京集との比較	一五、	天正二十年本原本との	二〇一、	東銳(利峯)	四、
其の體裁	二〇一、	伊京集との關係	一八、	關係	二〇一、	東京書籍商組合員圖書總	三五、
印度本原本との關係	二〇一、	伊勢本原本との比較	二四、	饅頭屋本との比較	二六、	目錄	三〇、
天正二十年本	二〇一、	印度本原本との比較	二四、	饅頭屋本との關係	二二、	東宮切韻	一六、
解題	六〇、六三、	部門の比較	二二、二七、	明應五年本との關係	二四、	東向坊	三九、
		所收の語の比較	二二、二五、	天正二十年本の原本	二〇、	東山往來	三九、
				其の體裁	二〇、		

東坡石鼓歌 東遊集 騰英妙茂 言經卿記 獨清軒 頓醫抄	三三七 二六一 二〇九 八八 二六〇 三三八	南瞻部州大日本國正統圖 南都多聞院日記畧 二體節用集 二中歷 日本紀纂疏 日本紀神代抄 日本一鑑 日本國盡 新撰類聚往來中の日本 國盡 諸本に於ける日本國盡 の關係 日本國見在書目錄 日本古刻書史 日本古代字書の説 日本諸國名節用集に於ける	一四二 二六八、三七七 三三八 一四〇、三九 二九〇 二六三 三四四 一四二、四六、五一 一四二 一四二、四 二九七 二二、三 二二六 一六	日本諸國名の所在 國語研究室本の日本諸國名 乾本に於ける日本諸國名の位置 日本六十餘州受領之高下 并片名同郡數事 日本六十餘州名數 日我 日次紀事 西三條實隆 年山紀聞 ハバ 葉唄節用集 佩文韻府 梅仙東連 梅膺祚	三三八 三三二 二四八 二四二、四三 一四二、四三 三四四、三四 三七四 三三八、二七 三四 三五四 二九七、三〇七 四二、二六八 二九六	白氏文集 白石先生手簡 博閑錄 橋本經亮 花家文庫 早引永代節用集 林崎書目記 林崎文庫 萬里集九 埤雅 比古婆衣 秀知 百詠注 百人一首 百衲襖 平他字類抄 伊呂波字類抄との關係 平他字類抄(五辻本の題號)	三三七 二六二 一三八 五 一三 三五 三四 三四 二九六 二六六 五 三七 二二 二五 一三三、三八三、九 三八 三八
--	---------------------------------------	---	---	---	---	---	--

平井休興 五三、 五五、 平井版易林本 八五、 解題 八四、八九、 平井版易林本を活字版とする説 八六、 冊數 八七、 別版易林本との異同 八九、九〇、九一、九二、 別版易林本との關係 九〇、 廣川獬 三五、 廣肥 一七、	附録と本文との關係 一五、 三六、 節用集原本に於ける附録の數 一五、 同じ語の附録にあるものと本文にあるものと 一六、 諸本附録比較表 附表第二、 部數(節用集諸本に於ける比較) 二八、二九、 節用集諸本に於ける部數の差異 二八、 節用集原本の部數 二九、 假名引辭書に於ける「ゐ」「を」「お」「え」「る」の諸部 三〇、三一、 易林本類の「ゐ」「お」「る」の部 三二、 易林本の「ゐ」「お」「る」の部 三三、 仙源抄に於ける「ゐ」「お」部 三三、	「る」の三部 三五、 「え」部と「る」部を分つたものと併せたもの 二九、 溫故堂本と増刊本との「る」部の由來 二九、 武家節用集 三〇、 福 三六、 藤原明衡 三九、 藤原季綱 三〇、三九、 藤原仲實 三〇、 藤原範兼 三〇、 藤原良經 三九、 佛心論 二八、 舟橋業忠 二五、 舟橋宣賢 二六、 文龜本 一四、一六、一七、 天正十八年本との關係 一五、 増刊本との關係 八三、 饅頭屋本を文龜本とする説 一五、 文明本 一〇、	文明六年本 一〇、一〇一、 其の系統 二五、 下學集との關係 二五、 分毫字樣 一四、一五、 玉篇の分毫字樣 一四、 分類體の漢字辭書 三七、 分類體辭書 二五、
富士野往來 一六、三六、三九、 婦人養草 三七、 附録(古本節用集の)二二、二五、 諸本に於ける附録の數 二二、二三、 諸本に通じて存する附録 二四、二五、二六、	部 三三、 部數(節用集諸本に於ける比較) 二八、二九、 節用集諸本に於ける部數の差異 二八、 節用集原本の部數 二九、 假名引辭書に於ける「ゐ」「を」「お」「え」「る」の諸部 三〇、三一、 易林本類の「ゐ」「お」「る」の部 三二、 易林本の「ゐ」「お」「る」の部 三三、 仙源抄に於ける「ゐ」「お」部 三三、	「る」の三部 三五、 「え」部と「る」部を分つたものと併せたもの 二九、 溫故堂本と増刊本との「る」部の由來 二九、 武家節用集 三〇、 福 三六、 藤原明衡 三九、 藤原季綱 三〇、三九、 藤原仲實 三〇、 藤原範兼 三〇、 藤原良經 三九、 佛心論 二八、 舟橋業忠 二五、 舟橋宣賢 二六、 文龜本 一四、一六、一七、 天正十八年本との關係 一五、 増刊本との關係 八三、 饅頭屋本を文龜本とする説 一五、 文明本 一〇、	文明六年本 一〇、一〇一、 其の系統 二五、 下學集との關係 二五、 分毫字樣 一四、一五、 玉篇の分毫字樣 一四、 分類體の漢字辭書 三七、 分類體辭書 二五、

一〇六、一五七、二六六、三六七、 木 本	復古撰 八六 放生會部類記 二六四 放生記 三三七 方生齋 二六七 本光國師日記 二五 本朝書籍目録 二四四、三〇〇、三七 本朝書籍目録外錄 二六六、二七一 本朝無題詩 三三 梵舜記 二六八、三七六
特徴 一六 門の順序 一五七 人名門(永祿五年本との比較) 一五 樂名門の名 二六 語數 二六 前田本に於ける特異な語 一六	マ 麻果(麻杲ともあり) 二九六 前田本 四一四八 解題 二八 其の系統 二八 其の書寫年代 四 前田本經亮本五辻本の 饅頭屋本
解題 七 其の特徴 七 其の系統 二二 其の出版年代 二六 其の開版者 二六 其の再版本 二六 其の異本 二六 門名 二六 人名門 二六 語數 二六 附録の數 二六 京町盡 二六 名乗集 二六 十千十二支の所在 二六 他の伊勢本との關係 二六 易林本との關係 二六 天正十八年本類との關係 二六 天正二十年本との比較 二六	ミ 未見の諸本(節用集の) 解題 一〇一、二五 其の系統 二四 三善爲康 三〇 源順 二九 妙觀院 六 名字抄 一三六、三九、四〇、四一、

名字集 三〇九 妙茂(竺芳) 一〇八、三六二 妙茂(騰英) 二〇九、二六二、二七二、三六二	ム	無言抄 三六、 村井古巖 三四 村井本 三四 解題 三四、三六 其の系統 二六、 冊數 三三、三三、三四 分冊法 二七、二六、 同類の他本との關係 一五、二六、	モ	メ 明應五年本 一〇三、一〇四、三六七 其の系統 二五、 伊京集との比較 四、 弘治二年本類及び溫故	堂本との比較 一〇四、 増刊本との比較 八三、 明應二年本との關係 一〇三、 明應二年本 一〇三、一〇四、 明應二年本に關する疑 一〇四、 明衡往來 三六、三九、	門 三、 門數門名及び門の順序九、 門立て(節用集諸本に於ける) 一五、二六、 諸本の門立ての比較 一五、二五、 各部に於ける門の數 一五、 門の順序 一五、 門の順序と其の成立の由來 一五、 各部に於ける門の順序 一五、 門名の異同 一六、 古本節用集諸本門名比較表 附表第三、 門名が同一であつて内容の異なるもの 一五、 門の比較と語の比較 一六、 門の有無と語の有無 一五、	八雲御抄 三三、三四、三二、 野馬臺詩 四三、三七、 山崎美成 一五、三三、	ユ	遊學往來 三九、 遊仙窟 三七、 祐盛 三四、 熊忠 二九、 西陽雜俎 三七、	ヨ	與作 六九、 良宣 二六、 吉野詣記 三七、三五、 養月齋 七、 楊氏漢語抄 二九、 雍州府志 二六、	ヤ	ラ
--	---	---	---	---	--	---	---	---	--	---	--	---	----------

禮記抄	二六三	了尊	二九〇、二九一	門數	一五二
洛中横小路堅小路	二三三	凌稚隆	二九七	門の順序	一五七、一五九、二四六
落葉集	三三四	林逸	二六七		三七
蘭例節用集	三三三	林逸の節用集	三七〇	イ部數量門	一五六、一六八
		林逸抄	二六六、二六七	イ部數量門の位置	一五六
		林家と節用集との關係	二六九		一六四
リ		林淨因	二六七	語數	一六二
俚言集覽	二九三	林宗二	四二六、二七〇、三七三	附錄の多少	一三二
李昉	二九六			京町盡	一三四、一四八
利峯東銳	四二			日本國盡	一四二、一四五
六書故	二九六	ル		易林本類の日本國盡	
陸佃	二九六	類字假名遣	三五三	との關係	一四一、一四二
陸法言	二九七、二九八、三〇七	類字源語抄	二二、三六	十干十二支の所在	一五〇
龍龜手鑑	二九六	類字墨水鈔	三六五	同類の他本との關係	
劉熙	二九六、二九七	類聚名義抄	二九三、三〇六、三六	易林本との比較	一六九、一七〇
兩足院(建仁寺)	四〇四、二六八	類集文字抄	三九三、三六	門立ての比較	二六八
兩足院本				門の順序の比較	二三八
解題	四〇四、三	レ		所收の語の比較	二四四
冊數	二二二、二四	禮部韻	三四五	附錄の比較	二四四
永祿二年本永祿五年本		禮部韻略	二九七、三〇〇	易林本との關係	二四五
との比較	一七五			門立て及び門の順序	
堯空本との關係	一七三				

から見たもの 二四、
國語研究室本との比較 三五、

天正二十年本との比較 三六、

本光國師日記に見える 三六、

和漢通用集 二五、

和漢編年干支合圖 三一、

和漢朗詠集抄 二六、

和漢朗詠集抄 二九、

和玉篇 二七、三三、三四、

和訓精要抄 三四、三一、

和訓栞 三五、

和事始 三七、

和名 一六、

和名抄 三八、

和名類聚抄 一六、一九、二七、

三〇、三一、三三、

倭板書籍考 二六、三七、

大正五年三月二十五日印刷

大正五年三月二十八日發行

編纂兼發行者

東京帝國大學

東京市京橋區築地三丁目十一番地

印刷者

野村宗十郎

東京市京橋區築地二丁目十七番地

印刷所

株式會社東京築地活版製造所

東京市日本橋區新石衛門町十六番地

發賣所

株式會社國定教科書共同販賣所

正 誤 表

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
二三	六	同群數事	同郡數事	二九〇	六	歸するもの	歸するもの
五〇	六	但	但	二九六	九	康熙字典	康熙字典
一三一	九	源語類字抄	類字源語抄	三	三	郭如玄	郭如玄
一八五	一五	觀れば	觀れば	二	二	模範として	模範として
一九五	二	弘治二年本	弘治二年本類	八	八	和訓栞	和訓栞
二〇四	一	一致する	一致する	一五	一五	所収の語は	所収の語は
二一七	八	「于戈」	「干戈」	右側	右側	縦八寸五分	縦八寸五分
二二六	五	出生于支那國	出生于支那國	右側	右側	縦八寸七分	縦八寸七分
二二六	九	于今 始干茲	于今 始干茲	二四	四〇・四二	四〇・四一	四〇・四一
二六四	一五	得講書三昧	得講書三昧	一八	二四	第二種第三種	第一種第二種